

# 根 Indriya にひつて

水 野 弘 元

## 一

根は佛教では二十二根として数えられる。二十二根とは、眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六根、女根、男根、命根の三根、樂根、苦根、喜根、憂根、捨根の五受根、信根、精進根、念根、定根、慧根の五根、未知當知根、已知根、具知根の三無漏根である。二十二根として纏められることは、原始佛教時代にはなかつたかも知れないが、その個々の項目の多くは原始佛教ですでに説かれていたものであろう。それが部派佛教時代、またはその直前のころに、二十二根として纏められたものであろう。現存する部派の文獻によるかぎり、すべての部派が二十二根を説いている。

原始經典以來の根の説をたどつて見るに、まずパーリの阿含經では、相應部の中に根相應 Indriya-samyutta があつて、そこには一八五經が收められている。その中、眼等の六根または意根を除いた五根に關する經典は八經（二五—三〇、

四一、四二經）、命・女・男の三根を説いたものは一經（二三經）、樂等の五受根に關するものが一〇經（三一—四〇經）、三無漏根を説いたものが一經（二三經）で、その他の一六五經はすべて信等の五根の全體または一部分を説いたものである。

つまり相應部の根相應は、修道論關係の諸項目を集めた部分にあるためか、根としては信等の五根を主として取り扱っていることが知られる。これを漢譯雜阿含と比較して見ても、漢譯には信等の五根を説いた經典だけしかなく、その他には修道論關係の三無漏根を説いたものが一經あるだけで、他の諸根を取り扱つた經典は漢譯にはその相當經が全く見出されないのである。

これは他の根が阿含時代になかつたというのではなく、根相應が修道關係の經典を集めたものであり、それ以外の根で漢譯に相當經のないパーリの經典は、後世に付加されたものである。この點から、原始佛教時代には根としての意義が

重視されていたのは信等の五根と三無漏根のような修道關係のものであつたことが知られる。これはパーリで經と論との中間的存在としての無碍解道においても同じく見られる所である。

無碍解道は阿毘達磨の先驅的なものであつて、ここには佛教の重要な教理學說が四十の項目として論ぜられているのであるが、その第四に根論 *Indriyakatha* というのがある。ここでは根に關する阿含の經說を掲げて、これを解説論究する方法がとられているが、そこで論ぜられている根はその大部分が信等の五根に關するものであり、僅かに三無漏根が簡單にのべられているにすぎず、その他の根にはまったく觸れることがない。

おそらくはこの根論は修道に關する根だけを問題としたのであつて、當時その他の根が知られなかつたのでもなく、また二十二根が纏められていなかつたのでもないと思われる。何となれば、この無碍解道の他の場所には、一切法と考えられるものを列擧して、一法乃至十法、根境識受、五蘊、六根、六境、六識、六觸、六受、六想、六思、六愛、六尋、六伺、六界（地水火風空識）、十遍處、三十二身分、十二處、十八界、二十二根、三界諸有、四無量心、四無色定、十二緣起、四諦等々が掲げられ、この中に二十二根が見出されるからである。ここでは二十二根という名目はないが、二十二の根が列擧さ

れているから、根を二十二として纏めることも、當時すでに行われていたことが知られる。

阿毘達磨時代になると、根はすべて二十二根として論ぜられるようになった。まずパーリ阿毘達磨では、分別論の十八分別の第五として根分別 *Indriya-vibhanga* がある。これは蘊、處、界、諦、根、緣相、念住等という佛教の重要項目の間に含まれているのであるから、佛教の教理學說としては二十二根は重要なものの一つに数えられていたことが知られる。これは說一切有部の阿毘達磨や舍利弗阿毘曇論について見ても同様であつて、有部論書では、法蘊足論二十一品中の第十七に根品があり、正量部系の舍利弗阿毘曇論では問分の第五に根品があつて、ともに二十二根が論ぜられている。

さらに有部では、發智論の中には佛教の重要教理を八編に分けて論じているが、その第六に根編があつて二十二根が問題とされている。後の綱要書時代になつても、例えば俱舍論はその全篇九品中の第二に根品において、二十二根等を論じているのである。

このように見て來ると、部派佛教時代には、二十二根は阿毘達磨教學の中で、重要な論究項目の一つであつたことが知られる。それでは二十二根は佛教の教理學說の中でいかなる意義や價值をもつものであろうか。この問題を探究するには、まず佛教以前のインド思想で根がいかに取り扱われてい

たかを検討する必要がある。

## 二

根 *indriya* の語はすでにリグ・ヴェーダ時代から存在し、その最初は *Indra* (帝釋天) の形容詞または屬性として用いられたものであろう。*Indra* は最高の神として自由自在の權力をもつていとされたから、*indriya* はその屬性としての「自在の能力」を意味したものであろう。それがさらに人間に存在する生命力、體力、性力、感覺力、動作力などにも用いられるようになり、ウパニシャッド時代になると、後のサーンキヤ哲學の十一根の思想が成立するようになった。

十一根とは、眼、耳、鼻、舌、皮の五知根、語、手、足、大小便道の五作根、これに意根を加えたものであつて、十一根説は後世ではインドの一般説とさへなつていつた。またヴェーダーンタ説では四内根として覺 *buddhi*、我慢 *ahankara*、意 *manas*、心 *citta* などを根とすることもあり、五知根、五作根に四内根を加えて十四根とすることもある。またジャイナ教では靈魂 *jīva* を一根者乃至五根者に區別するがこれは、五知根(感覺器官)の一乃至五を具する者を指している。

このように根の考えは、佛教以前からインド一般に存在し、正統派も非正統派も根を説き、佛教もそれらの影響のもとに根を説くようになったものと思われる。

根 *Indriya* じにりや (水野)

ところでインド哲學中の正統派バラモン教では轉變説を主張し、すべての現象の生住異滅の原因は、すべて宇宙の最高原理としてのブラフマン、またはこれを神格化した梵天(古くは帝釋天など)の全知全能者の力によるとされた。従つて生滅變化の根本の原動力はこの最高原理や最高神にあるのであるが、個々人における肉體精神上の諸作用としての諸根は、この全能の力から派生した部分的の力であるとされたものと思われる。従つてそれらは究極的には最高の全能者に歸せられるとしても、具體的な個々の力用は十一根などとして區別されたものであろう。

これに對して非正統派のシャモン(諸宗教)は積聚説を採用して、最高權力者としての全能の神を立てず、現象が生滅變化するのは、物質的諸要素の機械的な離合集散によるものであつて、これを動かす生命力としての唯一の原理や實體の存在を認めない。現象を生滅變化させるものは形式的機械的な永遠不變の諸原理にすぎない。マツカリ・ゴーサーラの十二要素中の苦、樂、得、失とか、ジャイナ教の五實體中の活動原理 *dharma*、靜止原理 *adharma* とか、ヴァイシエーシカ派の同、異、和合等の句義とかがそれである。

インド哲學の二大潮流としての右の有機的な轉變説、機械的な積聚説の間にあつて、佛教では現象の生滅變化の動力をいかに見たであらうか。佛教でも部派時代になると、説一切

有部などは現象を動かす原理的な力として多くの心不相應法などを立てたが、これは積聚説の影響によるものであろう。

しかしこれは佛教本来の立場ではない。釋尊の原始佛教では、現象の生滅變化の原動力として何を立てたかといえ、この點については嚴密な學問的考察はなされなかつたようである。釋尊の學説の出發點は、例えば五蘊、十二處とか、三法印、四諦、十二緣起の説とかに見られるように、日常的用語をもつて常識的立場から説かれていた。生滅變化の原動力についても、當時一般に用いられていた常識的な根 indriya の概念をもつてせられた。

つまり佛教における根の説は轉變説、積聚説という外教の形而上學説を去つて、常識的、合理的立場から、現象變化の原動力として立てられたものであると見られる。

佛教の二十二根説と外教の根説とを比較するに、まず佛教の眼等の六根は、外教の五知根と意根に同じであり、命根はジャイナ教などの非正統派で説く命 jīva (靈魂) にあたるであろう。もつとも外教では命を根としては説かなかつたが。女根、男根はそのものとしては一般に説かれないとしても、その概念はすでにブラーフマナ時代から存在し、それは五作根中の小便道の中に含まれていると思われる。

また佛教の苦、樂等の五受根は佛教獨自のものであり、受を根とすることは外教にはないようであるが、これもマツカ

リ・ゴースアラなどが苦、樂の要素を精神活動の原動力として説いていたのに何等かの關係があると思われる。佛教ではさらにこれを合理的に詳細にして五種に分けたものである。五受を根としたのは、佛教では認識作用などにおいて、根境識の三者の和合から觸が生じ、觸から受、受から想または愛が生ずるとされるように、受は想(概念)または愛(愛憎の念、貪欲瞋恚の思)を生ぜしめる原動力と見られるから、五受を根としたものであろう。

さらに信等の五根や三無漏根は外教では根として説かれていない佛教獨自のものである。ところで二十二根の中、眼耳鼻舌身意の六根は原始佛教にもつとも多く説かれているが、これは根としてよりも、六内處、六處という名稱で説かれることが多く、六根の語は後の時代に多く用いられるようになった。原始佛教時代に根としてとくに擧げられるのは信等の五根と三無漏根である。これは相應部における根相應、無碍解道における根論においてすでに見たところである。つまり佛教においては根としては信等の五根と三無漏根がもつとも重視されたことが知られる。

信、精進、念、定、慧の五つは、五根としても、五力としても説かれ、それらは修行項目としての三十七菩提分の中にも含められている。この五つは佛教の理想を達成するための修道の方法として、一つの完結した體系をなすものである。五

根と五力との區別は、五根が修行の出發點としての五つの能力であり、五力はその能力が實際の力として現われたものである。佛教の修行項目の中で、この五つがもつとも重要であると考えられたために、理想への原動力としてとくにこの五つを根としたものであらう。

つぎに三無漏根は五根等の能力が修行の進展に應じて、實際に聖位を獲得する力として立てられたものである。すなわち最初のさとりとしての見道位を得させる力が第一の未知當知根 *anābhātañāsaṃvīriya* であり、第二段の修道位を得させる力が第二の已知根 *ābhīriya* であり、第三段の最高のさとりとしての無學位を得させる力が具知根 *ābhāta-vīriya* である。

ところで三無漏根は心所法等からすれば、いかなる心所に屬するかについては、部派によつてその説が異なっている。パーリ佛教では、この三つはいずれも慧の心所に屬し、それぞれ無漏慧の一部分であるとされる。ところが説一切有部や正量部系の舍利弗阿毘曇論では、三無漏根は慧の心所だけではなく、そこには他の多くの根や心所その他が含まれているとされている。

### 三

以上見て来たように、二十二根は原始佛教では二十二に纏

められることはなかつたとしても、個人の肉體精神を活動させる具體的な能力として、常識的に根が説かれたものと思われる。

すなわち眼等の六根は感覺知覺の能力として認識判斷等をつかさどる原動力であり、命根は生命力そのものであり、男女根は男女の性的能力として本能的に存在する力である。男女根は肉體的のものであるが、命根はパーリ佛教がこれを色命根 *rūpa-jīvitindriya* (色法) と非色命根 *arūpa-jīvitindriya* (心所法) とに區別するように、肉體と精神の兩方の壽命をつかさどるものとされる。説一切有部や舍利弗阿毘曇論等は、命根が身心にわたる生命力であるために、これを色法にも心所法にも含ませず、色心を動かす能力としての心不相應法であるとした。

有部や舍利弗阿毘曇では、心不相應法としては命根の他に多くのものを立てたが、それらは原始佛教では根として説かれていない。命根だけは主體的な能力であるが、他の生・住・異・滅・得・非得・滅盡定・無想定等は主體的積極的な力ではなく、外教の活動原理 *dharma*、靜止原理 *adharma*、生・死・得・失、同・異・和合などのように、形式的論理的な力であるにすぎない。

つまり部派佛教における心不相應法は原始佛教における根の概念とも違つたものであつて、右に見たような外教とくに

非正統派の生、死、得、失等の思想に影響されて生じたものではないかと考えられる。従つて部派佛教時代になると、現象を動かす力として、一方では原始佛教以來の二十二根の説があり、他方では新たに心不相應法が立てられ、そこに不徹底と混亂が生ずるようになったと見られる。部派佛教で蘊、處、界、諦、緣起等と並べて根が説かれたとしても、根説は他の教理ほど重要なものとならなかつたのは、右のような理由によるものであらう。

ただ俱舍論等では根品が立てられたが、これは根の名によつて二十二根だけでなく、現象の作用を總稱するものとして根の名を用いたにすぎないものである。俱舍論の先驅としての阿毘曇心論乃至雜阿毘曇心論では根品でなく行品であつたが、行品の行 saṃskāra は作用一般を示すものとしては不適切であつたから、これを俱舍論で根品と改めたものと思われる。このことは俱舍論の根品では二十二根だけでなく、それ以外の心所法、心不相應法、六因五果、四緣、三界諸心の起滅等の諸法の生滅變化の作用論が多く取り扱われていることによつても知られうる。

しかし二十二根に關しては俱舍論に詳しい考察がなされているから、それを紹介することにした。

#### 四

俱舍論卷三によれば、根には最勝、自在、光顯の義があるが、總括すればそれは増上（すぐれたはたらき）の義となる。二十二根について増上の義を見るに、まず眼等の五根は、(一)身を莊嚴す、(二)身を導養す（危險を守る等）、(三)識等を生ず、(四)不共事（個別的）である、という四増上がある。

女根、男根、命根、意根には各二の増上があるとされる。男女根では(一)有情異、(二)分別異の二増上義がある。有情異とは男女の類別であり、分別異とは形相、言音、乳房等の別があること。さらに男女根は無根者や兩根者等とも區別される特徴があるとされる。

命根には衆同分（個體）をよく續け、よく持つという二増上義があり、意根にはよく後有を續け、自在に隨行するという二増上がある。

樂等の五受根は隨眠等の雜染に對して増上の義があり、信等の五根は清淨の諸法に對して増上の義があるとされる。樂等の五受根は淨法に對しても増上の義があると説く者もある。三無漏根は後の聖道や涅槃を得ることに對して増上の用があるとされる。

ここで現象の生滅變化をおこす原動力を根とすれば、輪廻流轉の原動力としての無明煩惱とか、サンキヤで説く五作根とかは根とならないかという疑問が生ずるが、根には増上の義のほか、根としての特相がなければならぬのに、無

明や五作根にはその特相がないから、根ということとはできない。

根の特相とは、眼等の六根は心の所依を相とし、男女根は相の差別を特相とし、命根は一期（生涯）の存続を相とし、五受根には雑染を成ずるの相があり、信等の五根は淨の資糧となる相を有し、三無漏根には清淨を成ずる特相がある。また餘師の説によれば、根の相として、眼等の六根は流轉の所依となり、男女根は流轉の生因であり、命根はそれを住せしめ、五受根はそれを受用するという相がある。また信等の五根は還滅の所依となり、三無漏根の中で、未知當知根は還滅の生因であり、已知根はそれを住せしめ、具知根はそれを受用するという相があるとされる。

無明や五作根には二十二根に見られるような特相がないから、佛教では根に加えないのである。

要するに、私見によれば、二十二根の中で、眼等六根と男女根、命根と五受根とは流轉雜染に對してだけでなく、還滅清淨に對しても、無記の動きに對してもその原動力となるものである。男女根は無根者や兩根者よりも淨に對しても染に對しても強く、無根者や兩根者の無能力と區別されるからである。これに對して信等の五根と三無漏根は還滅清淨に對する主たる原動力であるということができる。佛教ではこれらの個々の原動力の背後にあると考えられる根源的な力は、こ

れを形而上學的な本體的存在として、取り扱うことをせず、現象として現われている個々の力だけを認めるのである。佛教が無我説の上に立つかぎり、このような合理的科學的な態度をとるのは當然といわなければならない。

なお無明等の煩惱が根とされなかつたのは、それは主體的能力と見られなかつたからである。このことは原始佛教以來、心性本淨、客塵煩惱として、煩惱を外來の客塵としていたことから知られる。そして大乘佛教になると、修道關係の根として信等の五根や三無漏根はあまり問題とされず、むしろ六波羅蜜などがこれに代り、さらにその根源的なものとして主體的な清淨心性——佛性——菩提心などが論ぜられるようになった。しかしこれらは根としてではない。（昭和四十年度綜合研究の一部）

- 1 Samyutta 48 Indriya-S. (Vol. V, pp. 193-253)
- 2 Paṭisambhida-magga Vol. II, pp. 1-34
- 3 ibid. Vol. I, p. 7
- 4 Vibhaṅga pp. 122-134 他の分別では阿含經の引用による説明としての經分別 *suttanta-bhāṇiya* があるが、根分別には經分別がない。註書によれば、經典にはこの順序に二十二根がべられることがないからであるとされる。Sammohavinodani p. 125
- 5 法蘊足論卷一〇（大正二六・四九八b—四九九c）
- 6 舍利弗阿毘曇論卷五（大正二八・五六〇a—五六八a）

7 M. Monier-Williams: Sanskrit-English Dictionary p. 167

b ⑥ indriya ⑥ 根  $\nu\dot{r}$  mfn. fit for or belonging to or agreeable to Indra, RV.; AV. ....n. power, force, the quality which belongs especially to the mighty Indra, RV.; AV. ....exhibition of power, powerful act, RV. ....bodily power, power of the senses; virile power, AV. ....faculty of sense, sense, organ of sense, AV. .... $\nu\dot{r}$  ⑥°

Böhtlingk; Roth: Sanskrit-Wörterbuch Bd. I, S. 810 Indriya ③  $\nu\dot{r}$  ⑥°

a. Vermögen, potentia, zwingende Kraft, Übergewalt diejenige Eigenschaft.

b. Äusserung des Vermögen, Kraftthat, gewaltige Erscheinung.

c. Körperliches Vermögen, Sinnesvermögen, sinnliche Kraft. 等  $\nu\dot{r}$  ⑥° 四内根<sup>①</sup> これ五知根<sup>②</sup> 五作根を加えた十四根等を掲  $\nu\dot{r}$  ⑥°

Ardhamāgadhī Dictionary Vol. 2, p. 132af. imdiya ⑥ 根  $\nu\dot{r}$  ⑥ the five senses viz. eye, ear, nose, tongue and skin  $\nu\dot{r}$  ⑥ ⑦ 五知根のみを根  $\nu\dot{r}$  ⑥ ⑦ 掲  $\nu\dot{r}$  ⑥°

8 未知當知根の定義は Dhammasaṅgani p. 63; Vibhaṅga p. 124 にあつて、それは「かの未知、未見、未得、未覺知、未作證なる諸法の作證のための慧、知解、思擇、簡擇、擇法乃至擇法、正見、擇法覺支、道支、道所攝」とされ  $\nu\dot{r}$  ⑥°。同じく已知根の定義は Dhammasaṅgani p. 75; Vibhaṅga p. 124  $\nu\dot{r}$

具知根の定義は Dhammasaṅgani p. 117; Vibhaṅga p. 124 であるが、いずれも無漏慧として説かれてゐる。

9 説一切有部では、俱舍論卷三(大正二九・一四〇以下)によれば、三無漏根は意、樂、喜、捨および信等の五根の九根から成つてゐるとされる。

10 舍利弗阿毘曇論卷五(大正二八・五六一a)では、三無漏根は想、思、觸、思惟(作意)、覺(尋)、觀(伺)、解脫(勝解)、悅喜、心除(心輕安)、欲、不放逸、心捨、得果、滅盡定、正語、正業、正命、正身除(正身輕安)等から成つてゐるとされるから、それは慧の心所ではなく、想乃至心捨の諸心所と、得果や滅盡定のような心不相應法と、正語、正業等の無表色(無漏戒)とを含んだものであることが知られる。

11 以下の所説は俱舍論卷三(大正二九・一三b以下)にあるのを略述したものである。